

## P-70

## 高齢者医療における補中益気湯の役割

千葉県、医療法人社団伝統医学研究会あきば病院

○秋葉哲生

【目的】高齢者の疾患は老化による免疫能の低下や非典型的な症状による治療の遅延などで慢性の経過をたどりやすい。介護を必要とする高齢者の寝たきり患者は一般に易感染性で、褥瘡、肺炎などを併発しやすいことから重症化を防ぐためにも感染しないための体力の増強が必要と考えられる。漢方薬の中で、補剤の代表的方剤である補中益気湯には、NK細胞活性の誘導、MRSA 除菌効果、免疫調節作用などの免疫学的効果が報告されていることから、補中益気湯の使用により感染予防が期待される。今回、補中益気湯の高齢者における易感染性に対する作用について、発熱を指標に検討したので報告する。

【方法】平成11年12月から平成12年5月の間に全国の18施設の療養型病床群または老人保健施設に入院している65歳以上の患者338例を対象とした。補中益気湯(TJ-41)を投与した群(TJ-41群)とTJ-41を投与しない群(TJ-41非投与群)の2群に分け、解析が可能であった313例(TJ-41群:159例、TJ-41非投与群:154例)について発熱に対する有効性を、TJ-41を1回でも服用した168例については安全性を調査した。

TJ-41は最長12週間の連続投与とし、体温を毎日計測し、37.0度を超える場合を発熱有りとした。

【結果】平均年齢はTJ-41群80.76歳、TJ-41非投与群82.07歳であった。12週間の調査期間内に1日でも発熱した例数は、TJ-41群は99例(62.3%)、TJ-41非投与群は107例(69.5%)であり、4週間毎の検討では、1-4週時における発熱発現例はTJ-41群で有意に少なかった( $P<0.05$ )。4週間毎の観察日数に占める発熱日数の割合ならびに4週間毎の平均累計発熱日数は、TJ-41非投与群では徐々に増加したが、TJ-41群では変化が認められなかった。発熱時の体温を4週間毎に累積して比較すると、累積体温が4週間毎にTJ-41非投与群では高くなったが、TJ-41群では低くなった。

安全性については、未知の副作用および既知で重篤な副作用は認められなかった。

【考察】補中益気湯(TJ-41)は、高齢者の易感染性(発熱)に対して臨床的に有用であることが示唆された。